空の向こうへ

霜月フク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の向こうへ

【Ｎコード】
Ｎ３４３２Ｈ

【作者名】
霜月フク

【あらすじ】
現代。荒涼とした町の高台に俺達は佇んでいる。真実を知る事が本当に良い事なのだろうか？現在・過去・未来と時代を超え、自分のルーツを探る最果てに俺の出した結論はこれだ！

プロローグ

俺達はかつてそこに摩天楼があった町並みを見下ろす高台にいる。
今は崩壊してしまったこの世界。
その世界を夕日が赤く染め上げている。
どれだけ長い時間この世界を見続けてきたんだろう？

……意識が朦朧としてきた。
終わりが近い。
やっとここまできたんだ。

そう……やっとここまで……

「なんでっ！？　なんでなのっ！！」

男の胸に顔をうずめ泣きじゃくる彼女。

「その時はあたしがあなたを殺すかも知れないのよっ！？」

たった今全ての真実を告げたばかりなのだ。
理解に苦しむのも当然だろう。
周りを気にする事なんて今のキミには必要ないのかも知れない。

「いいんだ…もしそれで君と一緒に…なれるなら……」

止血した背中の痛みを必死にこらえ、震える彼女の肩を優しく包み

込み男はそう言った。

「さぁ行こう。そして…全て終わったら今度こそ……」

抗えない未来などあるはずがない。
そして今度こそ守ってみせる。
今も胸で泣き続ける彼女をその腕で優しく包みながら二人は再び歩き始めた。

始まりと終わりが待つ、あのビル目指して……

第一章　柳也（1）『逃亡』

時は遡り平安時代……

「ハァハァ……お～い『柳也（りゅうや）』殿～！」

息を切らしながら男が駆け寄ってくる。

「本当にここで合っておるのか～っ！？」

「ああ、この蔵に間違いない。」

弾む息を整えるのも束の間、俺は町の一角にある蔵作りの一つを指し示し地図を開いていた。

「辺りに気を付けろよ？賊避けの罠がそこかしこにあるやも知れぬ。」

俺は地図を見ながら例の入り口を探していた。

例の入り口とはこの蔵の正面にある入り口の事では当然なく、隠し扉…つまり『朝廷の行う政略に仇成す者が集う秘密の部屋』へつながる入り口の事だ。

連れの『西行（さいぎょう）』は公務中に屋敷から逃げ出しきた俺に何故かついて来てしまい、運悪く『賊扱い』され追われる形となってしまったのだ。

まぁかく言う俺もその一人なのだが……。

「しかし何故この様な場所なのだ？逃げるならもっと他にいい所が……」

カタッ……

どこかで扉の開く音がした。

「うっ、うわぁ～っ！！」

蔵前に目立たぬよう備え付けられた落とし穴が開いている。

「おい、西行っ！！」

俺は急いで駆け寄り西行が落ちた穴へと声を掛けた。

「おいっ！大丈夫かっ！？お～いっ！！」

相当深く掘られた穴に違い無いのだろう。

その底の見えぬ穴へ向かい自分の声が反響しているのが分かる。

そして暫く待ってみたが……

やはり返事は無かった。

「くっ！なんでだっ！？なんで俺達ばかりいつもこんな目にっ！！」

余りに突拍子も無い事なので気が動転し足が震えてくる。

次第にその悔しさで怒りとも悲しみともつかない涙が溢れてきた。

第一章　柳也（2）『出会い』

「……いの…そこの若いのや……」

俺は屋敷の追っ手が来たと思い、とっさ腰の鞘を握りしめ体勢低く辺りを窺った。

（泣いてる場合などでは無いな。）

相手が何人だろうと、この場を切り抜いてみせる。
しかしいくら辺りを見渡そうにも人影がない。

（おかしい…どこだ？）

「こっち…こっちです…」

その声は頭上の……蔵の屋根裏とおぼしき窓から掛けられていた。

「貴殿は？」

初めて見る顔がそこにあった。
しかし…不思議な事に敵意は感じられない。
いや、この場合殺気が無いと言い換える方が良いのだろうか？
妙な懐かしささえ感じるほどだ。

「感傷に浸ってる場合ではありません。縄を降ろしますから早く昇りなさい。」

その男の放つ言葉には凛とした響きがあり重みがある。

ゴトン…

蔵の屋根裏に位置する窓の一つが開き、そこから縄が放り出された。

「時間がない！早く！」

何故だろう？

俺はその話に疑問を抱かず縄をたぐり寄せ屋根裏に昇った。

「追っ手がすぐそばまでやって来ております！早く窓を！」

声を掛けて来た男が側近の者に指示し、手際良く窓が閉められていく。

これで窓に近づき大声を出さぬ限り、滅多な事で外から窺い知る事が出来ないようになった。

「柳也殿…あなたの事は母君より伺っております。私は『栄春（えいしゅん）』、さぁこちらへ……」

腰をかがめなければ歩く事の出来ないその屋根裏は一面に畳が敷き詰められており、小さな行灯が暗がりの部屋を隅でゆらゆらと照らし続けている……

第一章　柳也（3）『追想』

行灯の火がゆらゆらと奇妙な影形（かげかたち）を作り出し無数の陰影を産み出している。
その部屋で俺は後ろから男に声を掛け呼び止める。

「すまんが待ってくれないか？」

男はピタリと歩を止め、くるりと俺に振り返った。

「まず先に礼を述べさせて頂きたい。貴殿は栄春…そう申されたな？危ない所をかくまって頂き感謝申し上げる。しかし……なぜ俺の事を知っておるのだ？そして母の事も…？」

俺は率直な疑問を栄春に問い掛けた。
それから栄春は柔和そうな顔の口角にわずかな笑みを浮かべ、静かに語り掛けるよう口を開き始めた。

「そうですね…いったい何から話せば良いのか……。」

蔵の軒下では俺達を追ってきた屋敷の者どもが駆けつけてきていた。
せわしなく動き回り、俺の居場所を捜し回っているようだ。
そんな外の様子など気にせず栄春は膝を折り、畳の上へゆっくりと腰を落とした。

（この坊主ずいぶんと肝が座ってるな？）

そんな事を思いつつ俺もそれに習い畳へと腰を落とす。
そして栄春は教典でも読むかのように静かに話を続け始めた。

「6年ほど前…山道を歩いてた時の事でございます。」

「6年前？」

慌てて鸚鵡(おうむ)返しに答えてしまった。

（なんなのだこの坊主は？）

しかし外の喧噪や目前の俺の事など気にする風でもなく栄春は静かに話を続けている。

「当時、虚無僧(こむそう)であった私はある母子に夕暮れの山道で『賊』に襲われていた所を助けて頂いた事がございます。お忘れですか？その母子とはあなた様の母君であられる『静音(しずね)』様といま私の目前におられる柳也殿なんですよ？」

……覚えてない……いや、一年前から先の記憶が俺には無いのだ。

「それは真(まこと)か！？」

俺は前屈みになる姿勢で片手を畳につき栄春に尋ねた。

「真…でございます」

栄春はまっすぐ俺の目を見てそう答えた。

「そのとき静音様と柳也殿がどのように山賊を追い払われたのか…不可思議ではございましたが、私は深々と頭を下げて礼をしたのち『夕暮れの山道を子連れでの旅とは……どちらへお向かいなのでし

ょう？』そうお尋ね致しました。」

そこまで話すと栄春は側に立っていた男になにやら目配せをし、男はゆっくりと部屋の階下へ消えていった。
栄春はそれを目で追いながら話を続けていく。

「見るに静音様はもちろん、母のそばに立ってらっしゃる柳也殿の優美な…そして高貴な品を感じ、どこかのお公家様なのでは？そのようにお見受けしたからでございます…。お二人のお召し物はとても村百姓のそれではなく、襦袢（じゅばん）の上に羽織った衣は夕日が照らしたからそう見えたのでは決してなく、かたや桃琥珀…かたや翠蒼色…たいそう艶やかであられました。つい今しがた羽織を誂（あつら）えたばかり…まさにそのような出で立ちだったからでございます。聞く所によると静音様は探し物をしている旅の途中であるらしく『半月程前、東の国よりこの子を連れ屋敷を出てきました』そう申されるではありませんか？」

第一章　柳也（４）『転機』

そこまで言い終えると栄春は立ち上がった。
そして奥に飾られた大きな鏡の前まで進むと立ち止まり、俺にこう話してくる。

「柳也殿。我が国には異国より伝来する信仰が数多くございます。しかし朝廷はこの国にあるあらゆる信仰を止めさせ、なにやら不穏な行動を起こそうとしておるのです。」

（それと俺の過去になんの関係があるのだ？）

そんな俺の気を察したのだろうか？
栄春は慎重な面持ちで一つ咳払いをしたのちこう話した。

「これからお見せし、お聞かせ致します事すべて、柳也殿には奇々怪々とお思いになられる事でございましょう。ですが柳也殿。ご自分の過去の記憶、母君との思い出、そしてあなた様が持つ宿命を知りたけば私に着いてきて頂けませんでしょうか？」

そこまで言うと栄春は鏡へと手を伸ばし、スゥーッ…と吸い込まれるようにしてその場から消えてしまった。

「！？」

俺は自分の目が信じられず、いま何が起こったのか分からなくその場で惚(ほう)けてしまっていた。
しかし、自分の過去や母の事を知っている手掛かりが目の前にいるのだ。

（だが、宿命とは何なのだ？）

まぁ良いか……

今の自分に手に入れるものはあれど、失うものなど何も無い。

俺は畳から腰を上げスイッと鏡の前に歩み寄った。

「母上……」

そうぶつりと呟きながら鏡へと手をのばした。

すると……

「！！」

突然現れた『それ』に俺はまたしても自分の目を疑った。

第二章　神宮寺（1）『関係』

「ここでいいの？」

周りに見慣れない光景が広がっている。
荒廃した大地にひっそりと佇むビルを目にして彼女がそう尋ねてきた。
彼女の名前は『季崎（きざき）　絢（あや）』。
俺の『婚約者』だ……

今から三年前。
俺が大学に入り二年目の夏を迎えた七月。
受講したゼミで歴史研究の課題を出され、そのレポートを提出するため敷地内の別館にある教授の研究室へ行った時。
そんな時に彼女と知り合った。

いや、正確には『多少、知っていた』と言った方がいいのかも知れない。
彼女の家は俺の住んでいるアパートの近所で『挨拶程度はした事ある』間柄なのだから。

ちょうど彼女は一礼して、研究室から出てくるところだった。
同じゼミを専攻しているせいか、時々この部屋で会う事がある。
しかし別段話をする訳でなく、ここでも挨拶程度の関係。
お互い軽く会釈をし、俺は課題を提出するために教授のいる部屋へ

と入っていった。

「失礼します。『野上(のがみ)』教授、遅れていたレポート持ってきました。」

俺はバツが悪そうな顔をしつつ、そう教授に声を掛ける。

「やぁ『神宮寺(しんぐうじ)』くん、やっと出来上がったようだね。」

教授の座っている椅子がくるりと回転してこっちへ身体を向けてきた。

「すいません……以後気を付けます……」

「そうかい？」

椅子の上で背伸びをし、大きく口を開けて欠伸をしている。

「しかし今回のレポート、そんなに難しかったのかねぇ？」

机に置いてあったペットボトルのお茶を一口飲み終えると涙目の顔でそう尋ねてくる。

「いやぁ……難しいって言うか、バイトに忙しくって時間が無かったって言うか、アハハ……」

俺は気まずくなり口を濁しながら話を変える事にした。

「そういえば彼女、『季崎さん』……でしたっけ？彼女もレポート

の提出に来たんですか？」

教授は飲みかけの麦茶を再び口へ運び終えると立ち上がり、机に置いてあったタバコに火をつけ窓際へと歩き出した。
そして外から聞こえてくるラグビー部の掛け声がする方向を見ながらタバコをふかし始める。

「そうそう彼女、季崎くん。いやー彼女の場合ちょっと事情が違くてね。『提出したレポートを書き直したい』って言うんだ。彼女の家はここらでも有名な一族でね。なんでも家にある蔵から興味深い資料が見つかったって言うんだよ。」

そう話すと机の灰皿を取りに戻り、口から紫煙を吐き出して灰皿に灰を落としている。
そしてまた窓際へと戻っていった。

「書き直す……ですか？」

「ああ。彼女は真面目……って言うのかな？提出物の遅れは今までに無いし、まして提出したものを書き直したいなんていう事も今まで一度も無かったんだ。そんな彼女がどうして今回レポートを書き直したいって言い出したのか不思議でね。そんなに興味深い資料だったのかな？」

煙が目にしみたのだろうか？
教授は難しい顔をして涙を流している。
そして手に持った灰皿にタバコの灰を落としながらそう話していた。

俺なんか課題提出はいつもギリギリで、彼女がどうして提出したレポートを書き直したいなんて言い出したのかは想像もつかないが、

よほど良い資料を目にしたのだろう。

「そうですね。きっと彼女の言う通り良い資料が見つかったんですよ。」

俺はそんな相づちをした。

そして『この後バイトがあるんで失礼します』と言いながら煙で充満していくその部屋を後にした。

別館の校舎を出ると外はうだる様な暑さ。

七月の夏空は蝉時雨に支配されていた。

第二章　神宮寺（2）『接近』

そして……

そんな彼女とある日偶然親しくなる事があった。

学校から帰り、バイトも休み。
近頃の異常気象で日増しに暑くなるせいか自炊するのも億劫(おっくう)になり、
晩飯を駅前で済まそうと思い家を出たところだった。

お使いの帰りなんだろうか？
彼女の手には紙袋が握られていた。
それに普段学校ではズボンを履いた姿しか見た事が無い。
そんな彼女が今日は薄水色のワンピース姿で俺の玄関先に立っている。

そう、あの『季崎』がだ。

「ごめんなさい、いきなりお邪魔しちゃって……」

同じゼミ仲間で、近所に住む挨拶程度の間柄。
そんな彼女が俺の玄関先に立ってる。

「ど、どうしたんだい？」

俺は緊張で動揺しているのか、声が震えてしまっていた。

「これ、おかず作り過ぎちゃって。良かったら食べて下さい。野上

先生から神宮寺くんは一人暮らしだと以前お伺いした事があったので。」

「ありがとう」

俺は彼女から手提げ袋を受け取り、そんな素っ気ない挨拶をしていた。

でも、どうしたというんだろう？

今までこんな事は一度も無かったのに。

そんな事を思いつつ、俺は彼女の顔を見つめていた。

「あんまり上手に出来てないかも知れないですけど……」

彼女はそう言い、

「食べ終わったら食器は玄関前に出しておいて下さいね？それじゃあ私はこれで……」

そう最後にお辞儀をして彼女は帰ろうとしていた。

『季崎！』

俺は彼女の後ろ姿に声を掛けた。

「あの……良かったら上がってかないか？」

普段見かけない季崎の姿を見て気でも触れてしまったんだろうか？

なんで俺はこんな事を言ってるんだろう？

頭でそんな事を考えていたら急に恥ずかしくなってきた。

彼女は振り返り、

「お邪魔ではないでしょうか？」

そう言いながら立ち止まっている。

「いや、こんなもん貰ってスゴい気が引けるし……それにせめてお茶ぐらい出させてくれよ。」

彼女は腕時計に目をやり『それなら少しだけ』と言って笑顔を見せた。

そして俺のいる部屋へと踵を返してくる。

第二章　神宮寺（3）『兆候』

郷愁を漂わせるヒグラシの鳴き声が部屋の外では相変わらず続いている。

俺はそんな夕暮れの自室で台所の前に立ち、冷蔵庫から水出し用の麦茶が入っている容器を取り出して湯飲みに注いでいた。

『季崎。お前麦茶に砂糖入れるか？』

さっき急いで片付けたばかりの部屋の中央、そこに彼女はテーブルを前にして正座で座っていた。

窓の外が赤く色づき始めた景色を見てる…そんな彼女に対し俺は声を掛けた。

「え、砂糖？」

季崎は振り返り、訝（いぶか）しげな眼差しでそう答えてきた。

「そうだよ。『サ・ト・ウ』。俺の田舎じゃ麦茶に砂糖入れて飲むんだ。お前はどうする？」

別におかしな事を聞いた訳でもないだろう。

俺は軽く両肩を吊り上げジェスチャーをしてみせた。

「えーっ何それ？あたしはそのままでいいよ。でも麦茶に砂糖入れて飲む人がいるなんて初めて聞いた。」

そう言うと季崎は変に感心したような目で俺を見つめている。
俺は湯飲みに二人分の麦茶を注ぎ終え、両手でそれを持つと季崎の待つテーブルへと歩いていった。

「そうか？」

二人の前に運ばれた湯飲み。
俺はテーブルを挟んで季崎の前に腰を下ろす。
そして自分の分を持ち上げ、冷えた麦茶を半分飲み干した。

「でもさ、俺の友達もよくそんな風に聞いてくるよ。小さい頃から母親にこうして飲まされてきたし。ま、俺の田舎ではこれが普通の事だからかな？」

「ふ～ん。そうなんだ～……」

よほど珍しかったんだろう。
そう言って季崎はしばらく俺の湯飲みを眺めていた。
今までまともに喋った事が無いから判らなかったが、こうして話すと季崎も案外フランクな奴だったんだな。

「だけど一体どうしたんだよ？季崎がおかず持って来てくれるなんてさ。普段滅多に喋らない俺にこんな事するなんて今まで一度も無かっただろ？」

俺は飲みかけの湯飲みを手にしながらこっちを見ている季崎に対し、そんな疑問を投げ掛けてみた。

「そうよね。神宮寺くんとは普段、道で会った時やゼミの教室でしか滅多に喋った事ないし……。」

そう言って季崎は湯飲みをテーブルに戻すと、どこか真剣な目つきをしながら唐突に不思議な事を話し始めた。

「ねぇ神宮寺くん。もし……もしね？仮にこの世界が近いうち滅んでしまうとしたら……あなたはこれからどうする？」

窓から見える街灯が点灯し始める。
そして気付かないうちにヒグラシの鳴き声は止んでいた。

第二章　神宮寺（４）『発見』

外はすでに日が沈んでいる。
西日の差し込まなくなってきた部屋。
俺は頭を掻きながら立ち上がり、薄暗い部屋に灯りを付けた。
季崎はテーブルに置かれた湯飲みを手に取り、残りのお茶を飲み干した。
季崎が俺の顔を見つめている。
ここでどう切り返すべきなんだろう？
俺は唐突にふられた話の意図が掴めず、返事に困っていた。

「季崎。急にどうしたんだ？」

当たり障りの無い言葉で返事をし、季崎を横目に台所から作り置きの麦茶を持ってきた。
空の湯飲みに注いで腰を下ろす。
注がれた湯飲みを見つめながら、少しの間があって季崎が口を開いた。

「私のうちに昔…ううん…とても古い時代に建てられた蔵があるの。壁のあちこちに亀裂が入ってて親には危ないから近づかないよう言われているわ。その蔵には古くなってもう使われてない家財などがしまわれていて、外観からは二階にも部屋があるみたいなんだけど、家の誰もその事には気付いていないみたいなの。でね、そんな古い蔵だから郷土歴史の資料になりそうなものが一つぐらいあるんじゃないのかしらと思って父に尋ねたのよ、『一緒に探して』って。当然父は反対したわ。『危ないからダメだ』ってね。」

「そりゃ、そんだけ建物が傷んでたら普通反対するよな。別におか

しな話でもないと思うぜ？」

堰を切った季崎の話には続きがあるようで、『ううん』と小さく首を振り会話を続けた。

「私ね、昨日その蔵に入ったの…」

驚いた。

いつもの季崎から想像出来なかったからだ。

ただでさえフランクに会話する奴だとは思って無かったのに。

「それで入ったのはいいんだけど、蜘蛛の巣や床の傷みが酷くて思うように歩けなかったわ。一応、中の方は見て回ったんだけど二階に繋がる階段も見当たらないのよね。なんか損した気持ちになっちゃった」

そこで季崎は軽く溜め息をついてみせた。

「けど、蔵を出る手前で床の割れ目に光るものを見つけたの。何かしらと思って手を伸ばして拾ったわ。それがコレ。」

テーブルに置かれたソレはぱっと見、鈍い色彩を放っていた。

薄く作られており楕円形の中央には縦長の切れ目が入っている。

「これって…鍔（つば）じゃないのか？日本刀なんかでよく見るアレ…だろ？」

してやったり、とでも思われたんだろうか？

季崎は口角を上げ満面の笑顔になった。

そして『もっとよく見て』とテーブルに手をつき鍔を顔の高さまで

持ち上げる。
俺は焦った。
そんな嬉しそうに話す季崎に、まじかで見る俺の心音が聞こえてしまいそうで。

第二章　神宮寺（5）『遺物』

季崎の持ち上げた鍔。
その中央、刀を通す切れ目の両側に何かの文字が刻まれていた。

「えっと…コレ…何て書いてあるんだ？」

今とは勝手の違う文字に俺は眉根を寄せた。
一方、季崎はというと変わらず鍔を見つめている。

「この文字はね…神宮寺くん、紙とペン貸してくれない？」

「え？ああ、ちょっと待ってくれ。」

季崎が調べたところによるとこの鍔は平安時代末期に作られたものだという。
そして刻まれている文字は『天地開闢（てんちかいびゃく）ニシテ伊邪那岐（いざなぎ）・伊邪那美（いざなみ）ノ子々孫々代マデコレヲ継承ス』と読むらしい。

「あと…ここを見て。」

テーブルに置かれた鍔の側面を指差し、その文字を紙に書き綴っていく。

『継承者・神宮寺柳也』

冗談だろ？

その文字を見て俺は顔を上げた。
当然信じる事など出来なかったからだ。
だが正面に座る彼女の顔に冗談の片鱗は一切見られない。
そして嘘をついている顔にももちろん見れなかった。

「それだけじゃないの。」

彼女はポケットから携帯を取り出すとボタンを押し、何やら操作をすると画面を俺に向けてきた。

「コレを見て。蔵にあった鏡台の上に何かを綴った巻物が置いてあったの。そこにこんな事が…」

それは携帯で撮られた写真が写っていた。
一見古い紙に書かれていて読みづらいが、確かに見覚えがある筆跡だ。

『治承４年３月２０日　ここに記す　柳也』

巻物の内部は破かれており、詳しい事は不明だと彼女は言った。

「神宮寺くん。私ね、これを知った時、当然何かの冗談だと思ったわ。だって私の知り合いの名前が刻まれているんですもの。本気で信じ込む方が無理ってものよね。家の蔵から出てきた鍔にあなたの名前が刻まれているのは何故？これには何か理由があるはずなのよ。何故？なんでなの？古い時代に建てられた蔵、あなたの名前が刻まれた鍔、この時代この場所にある筈のないアラビア数字で書かれた巻物、ある筈の無い蔵の二階、きっとあの蔵なにかある筈なのよ。だから…だから！」

「まあ待て、落ち着け季崎、落ち着け！お茶でも飲んで一息入れたらどうだ？」

余程興奮していたのだろう。
季崎はお茶を一口飲み、『ふうっ…』と一つ吐息を漏らすと目を閉じた。
そして暫く思案でもしたのだろうか？
顔を上げた彼女の目には何かしらの確信が見て取れた。
俺は薄々だが季崎の話そうとしている事に感づいた。
そして、

「神宮寺くん。一緒にあの蔵を調べてくれない？私達ならきっとこの謎を掴める筈だわ。ね、お願い。」

落ち着いて話す彼女の言葉が耳に反芻し、自分でも知らないうちに了承の返事をしていた。

そういえば腹減ったなぁ。
紙袋に向けた俺の視線に気付いたのか、彼女は『ごめんなさいっ！台所貸してくれる？いま支度してあげるから。』そういって立ち上がると小走りに台所へ向かっていった。
幸か不幸か。
いま置かれてる自分の立場に腹の虫が軽快に返事をしたように感じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3432h/

空の向こうへ

2011年10月5日13時19分発行